
Ⅱ部「都市」総括

Discussion of Section II: Urban Society

中村慎一・宇野隆夫

NAKAMURA, Shin'ichi and UNO, Takao

「文明への道—都市と戦争—」をあつかう本セッションでは計10本の報告が行われた。そのうち地域的に東アジアを扱ったものは6本である。

東アジアにおける文明形成過程を考察する際、中国における一次的文明形成とその周辺における二次的文明形成とに分けて考えることが有効であろう。前者の問題を扱ったのが趙論文と中村論文、後者の問題を扱ったのが西谷、新田、崔、広瀬の4報告ということになる。

「中原世界の形成」と題する趙論文は、黄河中・下流域のいわゆる「中原」地域を求心点として政治、経済、文化が展開する体制（これを「中国世界」と称することも可能であろう）が、いつ、どのようにして形成されたかを論じたものである。紀元前3千年紀の後半以降、屈家嶺—石家河文化、良渚文化などの「地方文明」の様々な文化要素を受け入れた中原地域が、文化的影響力の点で勢力逆転を果たし、中国の中心としての地位を獲得したと説く。基本的には、嚴文明の「多元一体」説を敷衍させたものといえるが、辺境が中心に転化するというテーゼが前面に押し出されている。文明形成における「雑種性 hybridity」は本セッションのキーワードの一つとなったが、中国文明がその好例となるとの指摘はきわめて重要である。

中村論文は、新石器時代後期の中国各地に出現する大規模囲壁集落に焦点を当て、集落間関係、集落の規模と形態、宮殿の有無など、考古学的に可視な事項を中心に据えて議論を展開する。そして結論としては、湖北石家河、浙江良渚、山東兩城、山西陶寺などの数平方キロメートルの規模を持つ各地の拠点集落は都市と認定しうるものであり、それらをセンターとする政治組織は国家の段階に到達していたと主張する。夏・商・周三代の王朝以前には文明と国家の存在を認めない大方の見解に一石を投ずるものである。本論文においても中国世界の形成という問題への言及があるが、紀元前3千年紀という時代を玉器と囲壁集落とを表象とする独自の文明体系を築き上げた時代と位置づけ、黄河中流域が中心へと転化するの、青銅器祭祀という新たな宗教体系を創出することに成功した二里頭文化期以降とする点で趙論文とは異なる。

いずれにせよ、「初めに中原ありき」とする文献研究からの伝統的な中国史観に考古学が変更を迫りつつあることは間違いのないであろう。遅くとも紀元前2000年頃までには中原を求心点とする中国文明が形成された。この一次文明としての中国文明は、今度はその周辺に二次文明を生み出す核として作用し始める。朝鮮半島や日本列島、華南や東南アジアといった諸地域が、そうした二次的文明形成の舞台となる。

西谷報告は華南を「『中国』の周辺地域の一つ」としてとらえる、中国人研究者ではなかなか持

ちえない斬新な視点を提示している。西谷によれば、華南の地に国家と都市が成立するのは、南越国とその首都番禺にまで降るといふ。その成立の契機となったのは、漢帝国が出現し、それがマウリア朝インド、さらにローマにまで達する交易ルートを開拓したことにある。華南における国家と都市の成立を、中国とその周辺という枠組みの中でとらえるばかりでなく、さらにそれを突き抜けて、ユーラシア全域におよぶネットワークと関連させる壮大な構想である。なお、西谷の意向で、本報告書に当日の報告ではなく、別の論文が収録されることになったのは、残念なことであった。

中国からみて華南のさらなる延長が東南アジアということになる。この地域を扱った新田論文はメコン流域に地域を限定し、やや禁欲的に、中国やインドとの関係に取って踏み込むことなく、地域的な社会統合の進展を跡づけている。主に墓の副葬品として出土する銅鼓は個人の威信材であり、それが交通運輸の要衝から発見されることが多いことから、交易拠点を掌握した勢力の伸張を読みとる。また、従来看過されがちであった製鉄・製塩産業の重要性に注意を喚起する。鉄器や塩が重要な交易品目となる背景には、農業の集約化やその結果としての植物質食料への依存度の増大ということがあったはずであり、それは同時に大規模マウンド集落の消長とも関連する可能性がある。日本列島や朝鮮半島における環濠集落の形成と比較しうる好個の材料となろう。

「韓半島の文明化」と題された崔論文は、朝鮮半島における文明化を、正当にも、中国周辺での二次的な文明・国家形成と位置づけている。ただし、発表自体は従来の人類学的学説整理と文献史的成果の概観に大きく偏り、必ずしも他の発表者と議論がかみ合わなかった点が惜まれる。

広瀬論文の論点は多岐にわたる。なかでも、「余剰」は「備蓄、祭料、交易原資」として意図的に作り出されたものであるとする点、また、前方後円墳は「目で見える王権」であるとの主張などはとりわけ重要であろう。いわゆる権力の効率化に関してアメリカの政治学者メリアムが「クレデンダ」と「ミランダ」という二つの概念を用いて説明したことはよく知られている。つまり広瀬の言うことは、前方後円墳は一種のミランダであったということである。当然そこにはクレデンダとしての支配イデオロギーが伴っていたはずである。それが卑弥呼の「鬼道」であったと想像することは容易いが、広瀬はそこまでは言っていない。

以上、セッション2「文明への道—都市と戦争—」の東アジアに関する部分を概観してきた。いわゆる中原を中心とする中国文明というものが歴史的に形成されたものであり、そこでは地方諸文化のシャッフル・アンド・ビルドが大きな役割を果たしていることが明らかになった。そのようにして形成された一次文明の周辺にはやがて二次文明が形成される。一次文明からのヒト、モノ、そして情報の移入によって二次文明形成は一次的文明形成に比べてより急速に進展する。かつて佐原真は日本における「古代化の早さ」に注目したが、その問題を解くカギが今回のシンポジウムで提示されたのではなかろうか。 (中村)

セッション2の後半では、西アジア・地中海域・北欧からの発表を得た。これによって西洋における都市・文明研究の動向を理解し、東洋と比較する視点を得ることを意図したものである。なお欧米からの発表の特色は、資料から結論を演繹的に導くのではなく、各種の解釈モデルの資料への適合性を検証する姿勢にあった。

西アジアに関しては、世界最古の都市文明が生成した南メソポタミアを中心として、グレン・シ

ユワルツの論考を得た。

ウルク期（紀元前4千年紀）後半には、都市ウルクが周辺集落を再編しつつ200ヘクタールを越える規模に成長し、大型神殿を営み、文字・回転印章が出現したことが都市文明・国家の成立と理解されてきた。そしてこれに伴いウルク文化が西アジアに広く影響を及ぼした現象を、都市ウルクあるいは南メソポタミアを核とする世界システムの成立と評価する考えが著名である。また都市構造においては、神殿に対して宮殿の出現が遅れることから、神殿が宗教・政治・経済のセンターであり、それを神殿都市と評価する考えも良く知られている。しかし最近の調査成果はそのいずれのモデルにも否定的であり、等質的社会相互刺激モデル（Peer Polity Interaction Model）が、より適合的と評価された。

シュワルツは天水農耕が可能な北メソポタミアに対して、南メソポタミアでは灌漑が必須であるが潜在的農業生産力の高いことを強調した。そして南メソポタミアでは定住的農耕集落の成立が遅れるものの、人口が急速に増加して社会的緊張が強まる中で、多元的な契機をへて複雑な社会・都市が成長したとする構想を示している。

地中海域からは、サイモン・ストッダートが紀元前2000～1000年紀の動向について考察した。ストッダートは都市・文明の視点が一般的であるが、国家形成の視点の方が的確な議論を行いやすいとしている。

まず地中海東部のミノア・ミケーネ国家（文明）を起源とする伝播モデルには伝播先の水準が低下するという前提が存在し、実態に即さないとされる。また世界システムモデルは形を変えた伝播モデルであり、適用には工夫が必要であるとした。さらに等質的社会相互刺激モデルは、より適合的であるが、個々の社会に個性と格差が存在することに注意しなければならないという。

ストッダートは、自らのエトルリア（中部イタリア）の事例研究において、集落や埋葬の研究成果を景観として総合化し、そこから国家形成過程の復元を試みている。モデルとしてはポスト・コロニアル派の、ハイブリッド・モデルが適合的とされた。それは拡散・伝播が在在との相乗効果を生み、新しい発展がなされるというモデルである。

北欧については、宇野隆夫と新納泉が、日本との比較を視野に入れながらブリテン（イギリス）について述べた。

新納はブリテンと日本の環境の違いを重視する立場から、ブリテン鉄器時代の農耕が日本より粗放な性質をもち集落が散在したと指摘した。そして社会の基本単位が集落より個別経営単位にあったことが、ローマ時代以前における権力形成が遅かった背景と評価した。これに対して日本では集落の役割が高く閉鎖的なネットワークが権力形成を早めた反面、手工業者・商人の自立は遅れたとする。

宇野はブリテンと日本が、農耕・文明の先進地域から離れた北辺に存在するという環境を共有したことを重視して、歴史的プロセスの共通性を抽出することを試みた。ブリテンについては農耕社会の確立が地中海域よりもさらに遅れたが、青銅器時代後期にそれが確立して以後の発展は急速であり都市形成プロセスが始まったと考えた。そしてその転機の歴史的意義は、日本の縄紋・弥生時代の境に似た性質のものと評価した。

西洋編から発信されたことは多岐にわたるが、農耕社会の成立から都市・文明・国家への道は単

純ではなかったとすることが共通認識であろう。とりわけ農耕社会の伝播と融合・在地化は社会の飛躍の契機であり、都市・文明・国家の成立に連なることが多かったと理解した。この点は、東洋を考える上でも参考になるであろう。 (宇野)